

論 文

チェルニー50 番練習曲集の有効活用

Effective Uses of The Art of Finger Dexterity, Op.740 (Czerny, Carl)

宮田 信司 (高知大学教育学部)

MIYATA Shinji

Faculty of Education, Kochi University

ABSTRACT

The Art of Finger Dexterity, Op.740 (Czerny, Carl) is a collection of etudes for intermediate to advanced players who have completed The School of Velocity, Op.299 (Czerny, Carl). The School of Velocity, Op.299 (Czerny, Carl) is composed on the assumption that the damper pedal (right pedal) is not used, but most of The Art of Finger Dexterity, Op.740 (Czerny, Carl) are composed on the premise that a damper pedal is used. By using the damper pedal, the overtones overlap and the reverberation increases due to the opening of the strings, and the result is a natural richer timbre. Therefore, the learner can hit the keys without using extra force, and may approach the discovery of the original beauty of the tone. In this collection of etudes, I consider 6 etudes that are mainly aimed at using pedals. And I would like to reaffirm that it is a meaningful learning material that enhances expressiveness, not just physical exercise including fingers, hands and arms, and training of athletic ability called mechanical.

I. はじめに

作曲家カール・チェルニー (Carl Czerny 1791–1857) は、生涯を通して膨大な数の作品を残している。中でもピアノに関する練習曲集を多く残しており、「30 番練習曲集 (Études de Mécanisme Op.849)」「40 番練習曲集 (Die Schule der Geläufigkeit Op.299)」などは、従来からレッスン教材としても広く使用されている。また、これらの練習曲集は、他の小品と合わせて編集・出版されている例も多く、指導者も学習者も使いやすい練習曲集としてなじみが深い。

しかし「50 番練習曲集 (Kunst der Fingerfertigkeit Op.740)」は、小品と合わせての編集・出版も少なく、ドイツ語の原題「Kunst der Fingerfertigkeit」は、直訳すれば「指の最高熟練の技術」であり、ピアノ中級者から上級者向けの演奏テクニックの難易度が比較的高い曲が多く収録された教材となっている。

演奏テクニックには音符の配列によって「オクターブ・和音・分散和音・アルペジオ・トレモロ・跳躍・音階・重音 (3 度, 6 度)・トリル・装飾音・同音連打」などがあり、また奏法別には「レガート・ノンレガート・スタカート・レグジェーロ」などがある。そのほか「フィンガリング・ペダリング」も考えられる。

チェルニーのどの練習曲集にも共通して要求されるのは、手首と腕の柔軟性、指の力の均一化、1 指の使い方であり、これらは「40 番練習曲集」などでも扱われてきたが、「50 番練習曲集」ではその練習を継続するとともに、一曲が長くなっていることが多く、そのために弾き通す体力 (腕の筋力) や集中力をつけることも目的の一つとなっている。

また「40 番練習曲集」では補助的にダンパーペダル (右ペダル, 以下ペダル) を使用してもよい曲は数曲あるものの、ほとんどの曲にペダルを必要としておらず、ペダルの効果は特に意識して作曲されていないと思われる。

かつてヨーロッパではペダル使用は足が届くようになってから使用するという指導法もあったため¹、足の届かない子ども向けの教材が「40 番練習曲集」であり²、足の届くようになった大人向け教材が「50 番練習曲集」であるという考え方もできる。よって、ペダル使用が想定される「50 番練習曲集」には和声的にも音楽的にも「熟練した」美しい響きを求める練習曲が多いといえる。また指導者が教材として「40 番練習曲集」から「50 番練習曲集」へと直接に進ませることは必ずしも順序として決められているものではないので、それぞれの特徴を知った上で指導に当たることも求められる。

練習曲の目的として、「指を鍛える」「手を広げる」「手首を柔らかく使う」など、肉体的な訓練や体の使い方に注目し、それをもとに音の粒を揃えるなどの音色変化に結び付ける、ということは一般的である。しかしピアノの音色をどのように美しく作っていくかは、肉体的な訓練とともに耳の訓練を伴う必要があることは間違いない。その訓練のためにはポリ

フォニック教材を併用することが重要であることは言うまでもないが、「50 番練習曲集」の中で積極的にペダルを使用することにより、美しい音色や響きを作り、音や声部を聞き分けるポリフォニックな耳を育てる訓練ができるのではないかと、そしてその訓練がロマン派以降における、ある程度の濁りと混ざりを許容したペダル使用への準備になるのではないかと考えた。

II. ペダルについて

ここでペダルの役割について整理をする。ペダルを踏むことにより、全てのダンパーが上がり全ての弦が解放される。その結果として生まれる効果は、主に次の二つに集約される。
①共鳴が起こり倍音列も響き、音量・音色ともに豊かになる。その結果ダイナミックレンジが広がることになる。
②打鍵後に指を離してもその音が持続する。離れている音や和音をレガートに、またつなげて弾けることとなる。

①からは、a.ダイナミックレンジの拡大として響きが豊かにできる。また打鍵と同時に踏むことによりアクセントやスフォルツァンドの効果も可能である。

b.和音や分散和音の響きが豊かにできる。和音の性格や色彩感を増大させる。

②からは、c.アーティキュレーションの変化に対応できる。ペダルを切ることによりスラーの終わりをはっきりとさせる。ただしスタカートなどに使用される際には、必ずしもアーティキュレーションと一致しないこともある。

d.跳躍などで音が離れてしまう場合には、つなげたい時またその音を残したい時に補助的に使用される。特に和音を支える左手最下音が離れている場面では、最下音を残すことが必要となる場合がある (a.b.と併用されることもある)。

III. 考察

「50 番練習曲集」についてペダル使用の有効性を検討することとし、50 曲についてペダル使用が可能かどうか、またそのペダルを踏む意味について調査し、前述の役割を参考に分類した。その上で 50 曲の練習曲の中からペダル練習として有効性のある 6 曲を選択して練習する方法や実践的な指導法を提案していく。

1, 50 曲の中でペダルの使用できる曲は以下である (重複あり)。

a.ダイナミックレンジの拡大

6,7,15,18,26,27,31,32,37,38,41,44,46,50

b.ハーモニーの拡大

6,12,18,19,24,27,36,38,43,45,47

c.アーティキュレーションのため

3,9,14,18,20,22,23,24,32,33,34,36,37,47,49

d.跳躍等その他補助的な使用

2,4,7,8,9,11,12,13,14,15,20,22,26,29,30,33,34,35,37
38,39,42,43,44,46,49,50

2, ペダル使用の有効性の検討

50曲のうち40曲でペダルの使用効果があることが分かった(踏む, 踏まない, どちらでもよい場合もカウントした)。また d.跳躍等その他補助的な使用では, 上記以外にも限定部分にのみ使用可能な曲が存在し³, それらを考え合わせると全くペダルを使用しない曲の方が少数であることも分かった。

3, ペダル練習に有効な練習曲6曲の選択

番	調	速度表記	練習目的
6	As:	Molto Allegro e veloce	Deutlichkeit in gebrochenen Akkorden. (分散和音の各音をはっきりと)
18	As:	Allegro	Das Überschlagen mit ruhiger Hand und sanftem Anschlag. (穏やかな手の交差とやさしいタッチ)
19	B:	Vivace	Spannungen bei ruhiger Hand. (穏やかな手で緊張した動き)
24	As:	Molto Vivace	Der Daumen auf Obertasten bei völlig ruhiger Haltung der Hand. (黒鍵上の親指でも手は穏やかなままで)
27	D:	Allegro	Unabhängigkeit der Finger. (指の独立)
36	A:	Allegro leggiero	Leichter Arm bei geschmeidigen Fingern. (しなやかな指で腕は軽く)

これらの6曲は, ペダルの使用なしでは演奏不可能であり, 「50番練習曲集」の中でもロマン的で美しい曲である。またこれら6曲の練習目的の項にはドイツ語で「静かに, 穏やかに」の意味を持つ単語の *ruhig* が3曲に書かれている。手や腕を *ruhig* に保って音の粒は揃えるものの, ペダルを使ってハーモニー感を豊かにし, 美しい響きを際立たせる効果がある曲であることが分かる。

IV. 具体的な練習法と指導法の提案

6番 As-dur 2/4



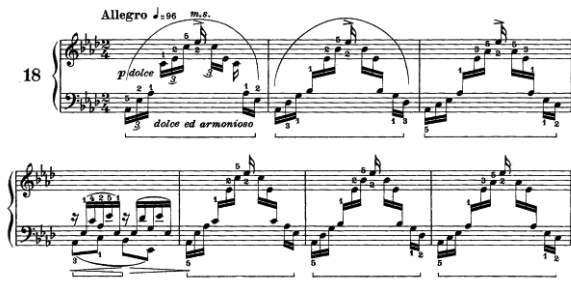
右手, 左手ともに32分音符で広い音域に指を広げて分散和音を弾く練習である。Aでは基本的に左手の最下音をペダルで残し1拍ごとに踏みかえながら和声が進行していく。拍の裏の右手1指を少し強めに弾き, 左手の残した最下音と共にメロディとして感じながら長いフレーズを作っていくとよい。8小節目はこのフレーズの終わりであり, 特に右手1指のメロディを意識する。それを繰り返したのち17小節目のBからは左手のスタカートに注意して2拍目を躍動感があるようにペダルなしで弾く。24小節目からはドルチェとレゾジェーロの表記があり, より軽快感を出す。その際, 右手の1拍目と2拍目の裏に少しアクセントを付けるとよい(31小節目まで)。また右手に現れるオクターブを揃えることに注意する。32小節目からのピアノッシモでは右手1指はすべてにメロディを感じて弾くのがよい。38小節目2拍目からの左手は, 5本の指すべてを和音として残すため指の独立に注意し, 慌てることなくしっかりと弾きたい。39小節目2拍目裏からの右手下行音階は, 長いペダルの中で濁りを意識し40小節目の後半でペダルを離す。50小節目からは右手の拍の裏にアクセント記号が付けられるので, 1指を意識して強く打鍵したい。57小節目からは長いコーダに入ったことを感じ, ディミニユエンドで静かに閉じていく。70小節目からは急にクレッシェンドに転じて, 最後はフォルティッシモの分散和音で曲を閉じる。

*ペダルの欄は, 踏む可能性のある箇所を記入することとし記入方法は種類として

「A:バス残し, B:踏みかえ, C:1拍ごと」なしやその他のものは具体例を記した。

小節	*ペダル	詳細
1~7	A, C	1拍ごとに踏みかえる。
8	A	1小節踏み続ける。
9~15	A, C	1拍ごとに踏みかえる。
16	A	1小節踏み続ける。
17~21	A	1拍目のみ
22~23	A, C	1拍ごとに踏みかえる。
24~31	A, C	dolce e leggiero
32~37	A, C	右手1指にメロディ
38~40	A	2小節半。左手の和音も残す。
41	なし	左手の休符を意識する。
42~48	A, C	1拍ごとに踏みかえる。
49	A	1小節踏み続ける。
50~53	A, C	右手1指にアクセント
54~56	A, C	1拍ごとに踏みかえる。
57~64	A	1小節踏み続ける。
65~68	A, C	pianissimo 1拍ごとに踏みかえる。
69~72	A	長いペダル

18番 As-dur 2/4



広い音域でのアルペジオを、左手での交差を伴って弾き、その際に右手の1指には不要なアクセントを付けずにスムーズな受け渡しをする練習曲である。

Aでは左手の最下音をペダルで残しながら1小節ごとにドルチェで和声が進んでいく。手を交差させて2拍目にアクセントをしっかりと響くように付けるのもこの曲の特徴である。4小節ごとにペダルをなくし、左手は指のみのレガートで移行していく。33小節目からのBでは、上声部では二声が6度で進行していく。34小節目と38小節目はハーフペダルで濁りを軽減する。43小節目から52小節目にかけて現れる上声部のスタカートはマルカートのようしっかりと響かせる。55小節目からは拍に合わせて細かくペダルは踏みかえ、63小節目から67小節目にかけてのフォルティッシモで曲の頂点を迎える。その後、自然にディミニュエンドさせて再現部に戻る。コーダでは左手の進行に合わせて細かくペダルを踏みかえる。97小節目では急に32分音符が出現するが最下音を長いペダルで残し、余裕を持って左手を交差させる。

小節	ペダル	詳細
1~3	A	左手の交差により2拍目にアクセント
4	なし	指によるレガート
5~7	A	1~3と同じ。以下繰り返される(32まで)。
8	なし	指によるレガート
17~19	A	左手の分散和音が広がる。
28	なし	左手、指による半音下降進行レガート
33	A	交差で6度の重音メロディ
34	ハーフ	33小節目のバスを残しながらハーフペダル
38	ハーフ	37小節目のバスを残しながらハーフペダル
43~44	A	交差してスタカート(マルカート)
45~46	A	Piano dolce
52	B	左オクターブレガート
55~62	C	交差・跳躍のためのバス残し
63~65	A	con bravura
67~68	A	68小節目の途中まで
71~84	A なし	再現部
85~86	B	左手の4分音符をつなげる。
97~99	A	速い分散和音のカデンツ

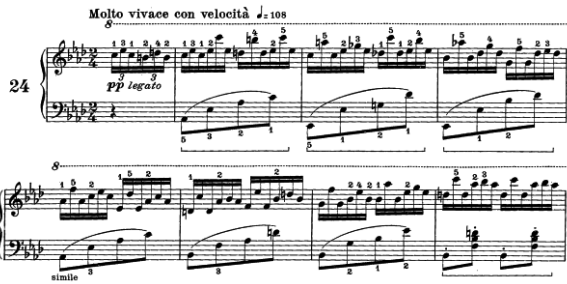
19番 B-dur 3/4



広げた右手の32分音符の連続の中で、右手の内声部のメロディを出し、全体の響きのバランスを考えながら和声を進行させていく練習である。Aでは左手の最下音をペダルで残し3拍目で和音が変わっていく。8小節目にはメロディが上声部に移行する。クレッシェンドが始まった13・14小節目では1拍ごとにペダルを踏みかえ、15小節目の頂点に向かって進行する。16小節目の移行部では右手内声に4分音符と8分音符が現れ、この違いはペダルの長さで差を付ける。17小節目からピアノで始まるBでは23小節目に頂点を迎え、そこでは10度の広がり度でトレモロを弾くことになる。この10度の連続トレモロは1指も5指もしっかりと打鍵し、慌てることなく弾きたい。24小節目の3拍目には珍しくポコ・カランドの指示があり少し落ち着かせて次の再現部に備える。25小節目からの再現部では、メロディの現れ方がAとは異なるが、右手の中でポリフォニックに対応してバランスのよい響きを心掛ける。27小節目からのクレッシェンドを利用して31小節目ではこの曲全体の頂点を迎える。ここの小節は時間をかけてたっぷりと豊かな表情で弾きたい。32小節目からは長いコーダになる。ピアノニッシモからカランドへと曲を閉じていくが、最後のアルペジオはフォルティッシモとなっている。

小節	ペダル	詳細
1~7	A,B	3拍目で踏みかえる。dolce ed armonioso
8	B	2拍目の裏はなし。dimin.
9~12	A,B	3拍目で踏みかえる。
13~14	C	1拍ごとに踏みかえる。
15	A,B	3拍目で踏みかえる。dimin.
16	B	4分音符と8分音符の違い
17	B	3拍目で踏みかえる。
18	C	1拍ごとに踏みかえる。
19	A,B	3拍目で踏みかえる。
20	C	1拍ごとに踏みかえる。
23	A	10度の跳躍
25	A	再現部だが音型が変化している。
32	B	pからppへ、そしてcalando

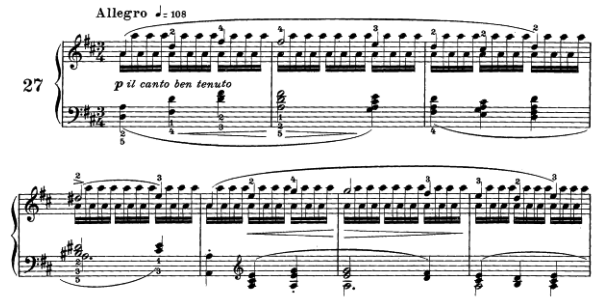
24番 As-dur 2/4



アウフタクトから始まる美しい曲であり、1指を黒鍵で使う練習曲である。右手はピアノシモであるが1小節目より右手の裏拍における5指、4指の最上音を少し長めにメロディ的に響かせると、より美しい音楽が形成される。また7小節目のスタカートや8小節目のようにペダルの少ない小節を作ると、音楽にメリハリがつく。17・18小節目の左手はペダルを踏む中でアーティキュレーションにも注意し、そして19・20小節目ではペダルを踏まないことにより双方の対比を浮かび上がらせる。24小節目の2拍目からはドルチェと表記があるものの、左手の上声部4分音符をレガートでつないで歌うことにより、ポリフォニックの練習ができる。またその声部は30小節目の2拍目から下声部に移行していく。40小節目からの再現部のヴァリエーションは、たつぷりと情感を込めて弾くことにより、この曲の頂点を感じてもらいたい。この曲は最後のカデンツ以外の右手はすべて16分音符での3連符である。レガート奏法を基本としてフレーズを意識して歌って弾きたい。また全体を通して、左手のスタカートにおけるペダルの扱いに注意を要する曲である。

小節	ペダル	詳細
1~6	A	1小節ごとに踏みかえる。
7	C	staccato
8	なし	左手の休符を意識する。
9~14	A	1小節ごとに踏みかえる。
15	C	staccato
16	なし	左手の休符を意識する。
17~18	A	8分音符 staccato のバスを残す。
19~20	なし	ここの staccato には使用しない。
21~22	A	8分音符 staccato のバスを残す。
24~31	C	左手の上声部のメロディをつなげ最下音部へ受け渡す。
32~39	A	1小節ごとに踏みかえる。
40~47	A	1小節ごとに踏みかえる。
48~53	1拍のみ	左手に8分休符あり
54~55	C	staccato
56~63	1小節おき	leggermente
64~67	なし	左手の休符を意識する。
68~70	1音ずつ	同時ペダル

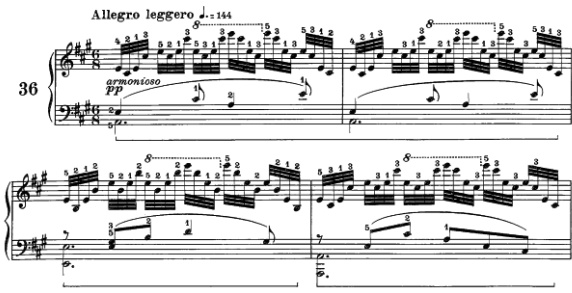
27番 D-dur 3/4



右手のオクターブのトレモロが、鳴り響く鐘の音を彷彿とさせ、その内側でメロディを出すというポリフォニックな手を作る練習である。Aでは右手オクターブのトレモロの中に2指、3指、4指でメロディが現れ、左手の上声部にもほぼ同様のメロディが現れるため、これらに合わせてペダルを踏みかえることになる。17小節目からのBでは左手の付点2分音符のオクターブをペダルでしっかりと残し深く響かせることにより、ダイナミックで厚い音楽となる。また、ここから右手のトレモロは開始音が5指から始まるので、内声のメロディとともにしっかりと弾きたい。その後21小節目のドルチェの指示を挟んで24小節目からはピアノで愛らしい響きを作る。28小節目のクレッシェンドと30小節目のアニメートの指示を経て32小節目からはこの曲の頂点を迎える。そこでは左手のオクターブを長いペダルで残すこととなるが、右手も含めて全体の響きのバランスを考えて弾きたい。48小節目からはアジタートとなり、右手の音型も重音を含んだ形に変化する。曲の頂点として、手の型を崩さないようにしっかりと打鍵が必要である。51小節目からは一転してドルチェとなり、この曲の終結部に向かう。右手の内声には重音でのトレモロが入り、響きのバランスに注意する。54小節目と58小節目の3拍目に現れる右手の上声部は、ドルチェの中でもしっかりと印象的に出しておきたい。右手、左手ともにポリフォニックな手を作る練習曲である。

小節	ペダル	詳細
1~16	B	メロディに合わせて踏む。
17~23	A	幅広く
24~27	A	右手が濁らないように
28~31	A	crescendoに合わせて踏む。
32~34	3小節	長いペダル注意
35	C	piano
36~47	B	メロディに合わせて踏む。
48~50	C	agitato
51~58	A	dolce
59~60	C	piano
61~62	C	crescendo と dim.
63~66	3小節	calando

36番 A-dur 6/8



右手での4オクターブのアルペジオを粒の揃った32分音符で連続して弾く練習である。右手は1指を経由して広い動きをするために1指にアクセントがつかないようにすることも練習に含まれる。Aはピアノシモで始まり8小節一つのフレーズを作り、その間、和音が変わる場面以外は1小節の間、最下音を残す長いペダルを踏む。Bが始まる17小節目では、右手に濁る要素の音(hとa)が混じるので、響きのバランスを考えながら弾く。19小節目後半の右手上行音階は音域が高いために濁りは少ないので、華やかに弾いても大丈夫である。24小節目からは左手がオクターブで半音の進行を交えて動くので、ペダルは細かく踏みかえる。曲の最後の2小節はクレッシェンドでしっかりと終える。全体を通して、右手の32分音符の広いアルペジオは和声の進行であるが、メロディとしての役割も果たしている美しい曲である。

*A:バス残し, B:踏みかえ, C:1拍ごと D:3拍ごと

小節	*ペダル	詳細
1~6	A	1小節踏み続ける。
7	B, D	和音の変化に合わせて踏みかえる。
8~13	A	1小節踏み続ける。
14~15	B, D	和音の変化に合わせて踏みかえる。
16	A	1小節踏み続ける。
17~20	A	1小節踏み続ける。濁りに注意。
21~22	A	1小節踏み続ける。
23	B, D	和音の変化に合わせて踏みかえる。
24~27	C	濁りに注意しながら細かく。
28~29	B, D	和音の変化に合わせて踏みかえる。
30~31	A	2小節のぼす。

V. まとめ

チェルニー50番練習曲集の中でペダル使用を主な目的とした練習曲について検証した。ペダル使用は単に「踏み・離す」の2択ではない。「踏みタイミング」には、打鍵の直前・同時・直後があり、鍵盤を押している長さも関係してくる。また「離すタイミング」はとても重要であり、すべてを記号で記載できるものではない。学習者のペダリングのタイミングは指導者のアドバイスによるものが大きい。

「50番練習曲集」にペダルを使用することによる学習者の利点は、1. 音の重なりを感じながら響きのバランスを考慮することによりハーモニー感が養われ、それにより学習者の耳が育つ、2. 音の粒を立たせるレグジュエロ奏法とは異なり、音のつながりを面として、和声として捉えることにより、結果として腕(指)を楽にする事ができる、などである。学習者の手の大きさや広がりなど肉体的特徴も考慮しなければならないが、どの曲においても機械的な運動能力の習得のみに捉われず音色への感覚や音楽表現の幅が広がると思われる。

また、今回の考察で「50番練習曲集」の中でペダルを使用して、音を混ぜていく、多少の濁りは許容する、という例が数か所見つけた。当時の楽器より現在の楽器の方がそもそも響きは豊富であるため、単純な比較はできないものの、美しい響きを生み出す演奏テクニックの習得にペダル使用が役立つものとする。そもそもピアノという楽器は、正確に調律された直後でも「音が濁っている」⁴⁾という考え方もあるので、音楽や音色を作っていく中でペダルの役割は大変大きい。音の濁りを感じながらも、学習者はペダルを使用しながら美しい音を作っていくかなければならない。ペダルを積極的に使用し、この練習曲集の有効活用に結び付けたい。

註

- 1 したがってヨーロッパでは現在でも子ども向けの「補助ペダル」の類は、あまり浸透していない。
- 2 子ども向けに手の大きさや広がりなどを勘案して書かれた教材と思われる。
- 3 カデンツをレガートに演奏するためや、終止音のみをフォルテで演奏する際に使用されている曲も存在した。
- 4 西口磯春, 森太郎 共著「もっと知りたいピアノのしくみ」音楽之友社(2005)

参考・引用文献

改訂 楽器の事典ピアノ 東京音楽社 (1990)
 最新ピアノ講座 第6巻 音楽之友社 (1981~1982)
 ヨーゼフ・ガード著, 大宮真琴訳「ピアノ演奏のテクニック」音楽之友社 (1974)
 西口磯春, 森太郎 共著「もっと知りたいピアノのしくみ」音楽之友社(2005)
 加藤一郎著, 「ショパンのピアノイズム その演奏美学をさぐる」音楽之友社(2004)
 ツェルニー50番練習曲 全音楽譜出版社 (1974)
 「L'ARTE DI RENDRE AGILI LE DITA Op.740 CARL CZERNY」EDIZIONI CURCI-MILANO